

私は社会の授業が好きだ。特に歴史の授業が好き。だけど歴史の中には戦争などの争いがあるのも事実。そこから目をそむけようはいけないと思う。

私が初めて火垂るの墓を見たのは幼稚園の頃だったと思う。そこに居たのは戦争で家族を失った兄・清太と妹・節子。二人は親戚に迷惑がられ、住む所もなく、それでも一生懸命生きようとしていた。初めて見た時はああ、何てかわいそうなんだろ、と

ほ、感じたが、今では考えられない事の連続だった。なのでこの話が何を伝えたいのか、幼い私にはよくわからなかった。

だけど中学生になりもう一度よく見ると、私はあるものに腹が立った。それは、この二人がここまですなくてほ生きていけないようにした、戦争そのものに村してた。どうして私と同年代の男の子が人の家の野菜を泥棒してなくてはいけないほど追い詰められなくてはいけないのだろ。なぜ親が死んでもその死

をこんな小さな子が涙も流さず受けとめなければいけないのだらう。子供達の心を育うさせてしまったのはまぎれもなく戦争だ。

私は幼い頃、清太が節子にレイトしたようにドロップ缶の中に水を入れて飲んだことがあ
る。最初は甘くてすごく美味しかった。だが
ど二回、三回と続けていくうちに味が金属
の味になっていった。これを節子が飲んでい
たのだと思うとすごく悲しくて悔しかった。

螢の命は本当に短い。人間の命も長い歴史

と比べれば一瞬の事だ。節子を失った時、清
太は一体何を考えていたのだらう。もし戦争
が無かったら妹はもつと生きていられたんじ
やないか。私だったらそう思ってたしもうだ
らう。おぶるのもめんどうだった節子だ。た
けれど、こんな世の中を共に生きた唯一の家
族だったのだ。実際、清太がどのように節子
の死を感じていたかはわからないが、多分は
私と同じ事を考えたのではないかと思っ
た。戦争というのは人の人生そのもののさ
えも大ま

くねじまげてしまう。戦争というのは本当に
その人の心も人生も変えてしまう悪魔だ。こ
の話を見てさらにそう感じた。

今の日本に戦争は無いけれど、これから社
会に出ていく私達が平和をさらに守り続けな
くてはいけないと思う。それをこの二人が自
分達の一生をかけて私達に教えてくれた。あ
りがとう。清太、節子。